

あとがき

「The Divided States of America」(アメリカ分州国)

今の米国を象徴する言葉として時折使われる言葉だ。アメリカ合衆国ならぬ、アメリカ分州国といったところだろうか。

様々な人種が競いながら活力のある米国を実現しようとする人々がいる一方で、白人が主体となった「古き良き時代」の米国を志向する人々がいる。その双方はこれまでも存在してきたが、どこかで折り合いをつけてきた。それが共存できなくなった状態が生じている。それを指した言葉だ。

この「アメリカ分州国」は既にオバマ政権時代から始まっていたという説もあるが、やはりトランプ政権になって更に顕著になっていると言ってもよいだろう。

それは米国の政治を動かし、その余波は米国の外交政策となって世界に波紋を広げている。パリ協定からの脱退、メキシコとの国境に巨大な壁を作る政策、イスラム教徒の入国を制限する大統領令、エルサレムに大使館を移す決定…どれ一つ、国内の分断を政治に利用しただけのものだ。

日本では、トランプ政権の外交方針を「強硬派」として妙に評価する人がいるが、そういう話は、実は米国のトランプ支持者からも聞こえてこない。そもそもトランプ支持者の関心がそこにはない。彼らの関心事は生活の向上であり国内の治安だ。下手に海外の問題に手を出すことなどやめて欲しいと思っている。

そうしたトランプ政権の一端をこの本から読み取っていただければ幸いだ。

この本は講談社のWEBマガジン「クーリエ・ジャポン」に2017年1月から14回連載した「トランプ王国研究」のうち10話を選んで再構成したものだ。

連載のきっかけは講談社の古くからの友人、広部潤氏だった。NHKを辞めると言ったとき、生活を心配した広部氏が連載の話を持ってきてくれた。その後、広部氏は部署が変わっても連載の担当を引き受けてくれた。感謝の言葉が見つからない。

連載はそれなりに読者の評価を得たようだったが、書籍化はそう容易ではなかった。なんと言っても無名のジャーナリスト…というよりもただの失業者である。採算ベースに乗らない。つまり、本にしても売れないということだ。

そうしたなかであけび書房代表の久保則之氏が声をかけてくれた。東京・九段下の事務所で久保氏とご夫人と3人で話をさせていただいた。夫人から、「私は次に何が来るのかワクワクするような内容の本が大好きなんです。この原稿はまさにそうでした」と言っていた。

実はその後になって大きな出版社から「うちで本にしないか」との誘いが来た。しかし、ご夫妻の温かな言葉は、私にその選択をとらせなかった。そして、南北会談後に急ぎよ、訪朝した部分などを加えるよう指摘を受け、素敵な本に仕上げさせていただいた。この場を借りて感謝したい。

また、米国から戻った無職の私にコメンテーターとしての仕事を与えてくれた毎日放送にも感謝しなければならない。その番組は「ちちんぷいぷい」という関西で長く続く情報番組

だ。テレビ番組を作ってきたものの、テレビで話す訓練などされていない私を温かく見守ってくれている。

最後になるが、この本は米国でのフェローとしての滞在がなければ書くことはできなかった。その際にお世話になった方々に英語で感謝の言葉を伝えることを許していただきたい。

I surely have to thank Todd Baldwin for letting me stay at his house. He also gave me idea of what I should write in the stories. I also must thank everyone who let me interview in each of the stories. And of course, I must thank American University community which gave me such an opportunity to stay in DC and follow Trump presidency. My respect and gratitude always go to Professor Charles Lewis of American University and Lynne Perri, the managing editor of Investigative Reporting Workshop AU .

2018年5月14日 立岩 陽一郎